

開発途上国における短期フィールドワークの教育的価値と学生の変容 —フィリピン・ダバオ地域における国際教育演習の包括的分析—

The Educational Value of Short-term Fieldwork in Developing Countries and Student Transformation
—A Comprehensive Analysis of an International Educational Seminar in the Davao Region of the Philippines—

清水 和 久（人間科学部こども科学教授）

Kazuhisa SHIMIZU (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

〈要旨〉

人間科学部の国際教育演習としてフィリピン・ダバオへ2週間の研修を行った。学生の日々の振り返りや筆者の記録から、この研修の学生の学びを以下の5つの観点に分類してまとめた。分類項目、1)「不便さ」の教育学：生活環境の激変と適応、2)社会経済的リアリティ現実：貧困、廃棄物、そして幸福論、3)教育現場の比較：公教育と私学の比較、4)異文化コミュニケーションのダイナミクス、5)身体性と五感を通じた学び：スポーツと遊びの役割。また、参加者の研修後のアンケートからも、研修に対する肯定的な評価が多く、「人と人とのふれあいの大事さ」「日本のインフラに対する再評価」「そして教員としての資質能力の向上への寄与」などの点で大きな成果があったと考える。

〈キーワード〉

スタディーツアー 国際教育演習 開発途上国 フィリピン・ダバオ 児童養護施設

1 はじめに 研究の背景と目的

日本の高等教育機関において、グローバル人材の育成は喫緊の課題となっている。文部科学省の「トビタテ！留学JAPAN」⁽¹⁾をはじめとする政策的イニシアチブは、単なる語学力の向上を超え、異文化理解能力、主体性、そしてレジリエンス（回復力）の涵養を求めている。先進国への留学がアカデミックな知識習得や語学研鑽に重点を置く一方で、開発途上国へのフィールドワークは、貧困、インフラの未整備、社会的不平等といった「生の課題」に直面させることで、学生の価値観を根底から揺さぶる「変容的学習（Transformative Learning）」の機会を提供する点において独自の教育的価値を持つ。

本書の内容は、金沢星稜大学人間科学部が実施した「2025年度 国際教育演習（フィリピン・ダバオ研修）」の詳細な分析を通じて、大学生にとっての途上国研修の多層的な価値を検証するものである。本演習は、フィリピン・ミンダナオ島のダバオ市およびダバオ・オリエンタル州をフィールドとし、児童養護施設「ハウスオブジョイ（HOJ）」での滞在、公立・私立教育機関の視察、現地学生との交流、そして環境問題や貧困地域の視察を含む2週間のプログラムである。

参加した学生は10名（男性4名、女性6名）の日々の振

りかえりレポート、研修後のアンケート回答、および引率教員である筆者の報告書（最後に添付）を一次資料とし、現地の社会経済状況に関する外部データを二次資料として統合することで、単なる感想文の分析に留まらず、教育プログラムとしての構造的有効性と学生の内面的成長のメカニズムを解明することを目的とする。

本年度の演習は、外務省によるダバオ・オリエンタル州の危険度レベル引き下げ（レベル2から1へ）を受け、昨年度は行けなかったダバオ・オリエンタル州のHOJでの6日間の宿泊研修を前半のメインの活動としている点に特徴がある。将来教員を目指す学生に対して「開発途上国の実情を肌で感じ、子どもたちとの深い交流を通じて人間的な成長を促す」という教育的ねらいをもった研修である。よって今回の演習の自体の目的を以下の3つとした。

1) 開発途上国（フィリピン）の実情の把握：

教科書的な知識ではなく、五感を通じて途上国の生活環境、貧困、教育格差を体感し理解する。

2) 異文化交流の実践：

言語の壁を越え、現地の児童や学生と協働し相互理解を深めるコミュニケーション能力を養う。

3) 自己変容とキャリア教育：

日本の恵まれた環境を相対化し、自身の生活態度や将来

の教員としてのあり方を再考する。

2 研究の方法

- 1) 国際教育演習フィリピン研修の企画立案と実施
- 2) 参加学生による振り返りレポートと参与観察を通して、学生の学びについて分類し価値づける。
- 3) 学生へのアンケート調査から研修を総括する。

3 研究の内容

3.1 国際教育演習の研修内容の立案と実施

本演習は、小学校教育に携わる人材育成の一環として、約10年の歴史を持つプログラムである。教員を目指す人間科学部の学生が異文化に触れ、現地の人々と交流することを目的としている。ミンダナオ西部に起こったテロ事件の影響で訪問地をダバオからセブに変更したり、コロナで中断したりしたこともあるが、「将来教育に携わる人間科学部の学生が異文化に直接触れ、人々との交流を通じて人間的に成長すること」「教室などでの学びを実社会と結びつけ、国際的な視野を広げること」に重きを置いて実施してきた。

規制が厳しくなかった過去には、ダバオ・オリエンタル州への訪問もあった⁽²⁾が、昨年度から外務省において、フィリピンのミンダナオ島のダバオ・オリエンタル州の危険度の認定が正式に2から1に引き下げられた。この外務省の危険度の認定は地域の実情とは、だいぶかけ離れたものになっており、前任のダバオの総領事である石川氏の働きかけのもと2025年度から改善されたものである。このダバオ・オリエンタル州のサンイシドロ市に位置するのが児童養護施設ハウスオブジョイ（HOJ）である。危険度が下がったおかげで、今年度はこの施設の滞在を中心とする滞在型の研修を組むことができた。

3.1.1 研修の概要

- ・期間: 2週間
- ・場所: 前半（フィリピン、ミンダナオ島ダバオオリエンタル州）後半（ダバオ市内）
- ・参加者: 学生10名（男子4名、女子6名）、引率教員2名
- ・主な訪問先:
 - ・ハウス・オブ・ジョイ（HOJ）
 - ・HOJ近隣の漁村（バトバト村） ゴミ埋め立て場
 - ・ダバオ市 公立小学校（バラクタン小学校）・私立学校（日系人会小中高校）
 - ・ダバオ市 ミンダナオ国際大学（MKD）

3.1.2 フィリピン・ダバオ研修のねらいと内容

研修のねらいを以下の5つとし、ねらいが達成できるように2週間分の研修企画を作成した。

- 1) 「不便さ」の教育学：生活環境の激変と適応
- 2) 社会経済的リアリティ現実：貧困、廃棄物、そして幸

福論

3) 教育現場の比較：公教育と私学の比較

4) 異文化コミュニケーションのダイナミクス

5) 身体性と五感を通じた学び：スポーツと遊びの役割

表1 「国際教育演習フィリピン・ダバオ」の研修（内容と研修のねらい）

日	日時	活動地	内容	ねらい
1	8/27	移動日	金沢→中部国際空港→マニラ→ダバオ宿泊 ダバオ泊	
2	8/28	HOJ	市場で材料買い出し、カレー作り 夜光虫観察	生活
3	8/29	HOJ	バトバト村漁村訪問 人生ゲーム ゴミ埋め立て場見学	社会
4	8/30	HOJ	学生主催のHOJの児童とゲーム大会	遊び
5	8/31	HOJ	ウラワビーチでHOJの児童と遊ぶ	遊び
6	9/1	HOJ	カカオ農園見学 鶏の買い出しと調理	生活
7	9/2	マティ	島めぐり観光 アイランドホッピング	異文化理解
8	9/3	マティ	サバンガン博物館訪問、ダバオに帰ってのSMモール訪問	異文化理解
9	9/4	ダバオ	バラクタン公立小学校訪問	教育
10	9/5	ダバオ	ミンダナオ国際大学（MKD）訪問	教育
11	9/6	ダバオ	サマール島他アイランドホッピング	異文化理解
12	9/7	ダバオ	People's park 国立博物館 クロコダイルパーク訪問	異文化理解
13	9/8	ダバオ	日系人会私立小中学校と高校訪問	教育
14	9/9	移動日	ダバオ→マニラ→関西空港→大阪→金沢	

3.2 研修の5つのねらいと学生の学びの詳細

3.2.1 「不便さ」の教育学：生活環境の激変と適応

ダバオの空港（正式名フランシスコ・バンゴイ空港）に到着した瞬間から、学生たちは日本との圧倒的なインフラ格差に直面することとなった。特に、最初の滞在拠点となった児童養護施設「ハウスオブジョイ（HOJ）」や現地の公共施設における衛生環境の違いは、学生たちにとって最初の、そして最も強烈な体験となった。以下学生の日々の振り返りも参考にして3点にまとめた。

3.2.1.1 常識となっている日本のインフラ環境の崩壊

多くの学生がレポートで言及したのがトイレと水の問題である。日本では自動洗浄や温水洗浄便座が標準化しているが、フィリピンの多くの場所ではトイレトーパーを流すことができず、手桶（タボ）を使って水を流す必要がある。ある学生は「トイレに紙があること、水回りが綺麗

であることがいかに有り難いか痛感した」と述べており、生理的な不快感や戸惑いが、逆説的に日本の社会インフラがいかにあたりまえでないかを感じていた。また、HOJでの「水シャワー」や頻繁な停電、部屋に侵入する虫との共存といった経験は、学生たちの潔癖な感覚を強制的にリセットさせた。

学生の日々の振り返りを読むと、当初、居住環境について不満が見られたが、筆者は、このトラブルや不便さを肯定的に捉え、環境に適応していくプロセス自体を教育の一環として位置づけていたため、特に積極的な対応策は取らなかった。実際に、はじめは衛生面での不安を訴えていた学生も、研修後半には「郷に入れば郷に従え」の精神で、ハエを払いながら食事をすることや、水シャワーを楽しむ余裕を見せるようになった。これは、快適な環境に依存していた自己の殻を破り、どのような環境でも生存・生活できるという自信（レジリエンス）の獲得を示唆している。HOJには電気やお湯がないわけではないが、ここにいることもたちが大人になったとき、そのような暮らしが保障されているとも限らないので、薪でご飯を作り、井戸水での洗濯などの生活水準を維持しており、必然的にビジター（大学生）もその作法に従うことになる。日本ではなかなかできない経験である。

3.2.1.2 「命をいただく」体験：食と生命の倫理教育

本演習における最も象徴的なプログラムの一つが、市場で生きた鶏を学生が購入し、学生自身の手による屠殺・調理体験である。日本のスーパーマーケットでは「精肉」としてパック詰めされた商品しか目にすることのない学生たちにとって、生きている鶏の首を絞め、血を抜き、羽をむしるというプロセスは、衝撃的かつ根源的な体験であった。

学生のレポートには、「鶏が死ぬ瞬間の羽ばたき」や「血の温かさ」に対する生々しい記述が残されている。ある学生は「かわいそう」という感情と向き合いながらも、私たちが日々摂取している「命」の重みを物理的な感覚として理解したと述べている。この作業は、学生には強制ではなく、希望者を募ってこの体験をおこなった。10人中6人がこの「命をいただく体験」を希望しておこなった。これは単なる料理体験ではなく、生命倫理教育としての側面があり、この体験を経た後の食事において、学生たちの「いただきます」という言葉には、これまでとは異なる重みと感謝が込められるようになったことが報告されている。

3.2.1.3 共同生活による連帯感の醸成

不慣れた環境下での集団生活は、学生間の関係性をも劇

的に変化させた。参加者アンケートにおいて、「一緒に行ったメンバーとの交流」に対する満足度は100%（全員が「とてもそう思う」）を記録している。スーツケースの破損、体調不良、慣れない食事といった数々のトラブルを共有し、互いに助け合う中で、学生たちは「個」の集合体から強固な「チーム」へと変貌した。HOJでの自炊活動（カレー作りなど）や、毎晩の振り返りミーティングを通じて、学生たちは本音で語り合い、他者を理解する深みの重要性を認識していった。ある学生は「行く前は交流がなかったが、楽しさも苦しさも共有したことで一生の仲間になった」と述べており、過酷な環境が触媒となって人間関係の質的転換をもたらしたことがわかる。帰国後もフィリピンに一緒に行ったメンバーは絆が強く、本学の別の海外研修プログラムに一緒に応募しているほどである。

3.2.2 社会経済的リアリティの直視：貧困、廃棄物、そして幸福論

ごみ集積所に起因する環境問題、経済的な貧困問題、それに対するフィリピンの人々の人生に対する考え方から学びをまとめる。

3.2.2.1 廃棄物管理の危機的状況と環境問題

研修3日目に実施されたごみ集積所の見学は、フィリピンが抱える都市問題の深刻さを視覚的・嗅覚的に突きつけるものであった。ダバオ市では1日あたり約700~800トンのゴミが発生しており、既存の埋立地は容量を超過している状態にある。特に、焼却処分が法律（Clean Air Act）で制限されているフィリピンでは、ゴミはそのまま埋め立てられるか、野積みされる運命にある⁽³⁾。

学生たちは、広大な敷地に積み上げられたゴミの山と、そこから漂う強烈な腐臭、そしてゴミの中から有価物を拾い集めるスカベンジャー（ウェイスト・ピッカー）の存在を目の当たりにした。ウェイスト・ピッカーたちは健康リスクを冒しながら金属やプラスチックを回収し、日々の糧を得ている。学生のレポートには、「日本のように分別や焼却が進んでいない現状に衝撃を受けた」「プラスチックが分解されずに残り続ける未来への恐怖を感じた」といった記述があり、日本の整った廃棄物処理システムがいかに恵まれているか、そして地球規模での環境問題がいかに待ったなしの状況にあるかを痛感している。

3.2.2.2 バトバト村における貧困と「豊かさ」のパラドックス

HOJ近隣の漁村・バトバト村への訪問は、経済的な「貧しさ」と精神的な「豊かさ」の定義を問い直す機会となった。この地域はフィリピンの中でも貧困率が高いエリア

の一つであり、漁業従事者の多くは不安定な収入（月収7,000ペソ以下、約18,000円以下）で生活している。天候が悪ければ漁に出られず、その日の収入が絶たれるという厳しい現実がある。学生たちは、HOJの澤村氏の案内のもと、この村を訪問した。村には、前日の天候不順のため漁に行けなかった男たちが多くいたり、学校に行かない子ども達が多くいた。我々一行はこの村を見降ろす、HOJの別棟で「HOJ版人生ゲーム」というシミュレーションボードゲームを行った。これは、HOJで働いていた学生スタッフの手によってつくり伝えられたもので、生まれ（富豪・普通・貧乏）や学歴によって人生の選択肢が大きく制限されるフィリピンの社会構造を模したものである。ゲームを通じて、努力だけではどうにもならない構造的な不平等を疑似体験した学生たちは、その後の村の散策で、実際の住民たちの姿に目を向けた。そこで彼らが目にしたのは、経済的には困窮していながらも、家族や隣人と笑い合い、ゆっ

たりとした時間を過ごす人々の姿であった。学生レポートには、「お金がなくても幸せそうに見えた」「本当の幸せとは何かを考えさせられた」という感想が多数見られる。物質的な豊かさを追求する日本社会で育った学生たちにとって、バトバト村の人々の姿は、資本主義的な価値観に対する強烈なアンチテーゼとして機能した。これは、経済指標（GDP等）だけでは測れない「ウェルビーイング」の実存を肌で感じる経験となった。

3.2.2.3 データと実感の統合

以下の表は、学生が現地で体感した社会経済的リアリティと、外務省の客観的な統計データ⁽⁴⁾を対照させたものである。フィリピンを訪問することで環境問題、貧困問題を知るとともに、その中でも心豊かに暮らすフィリピン人の様子から、精神的な豊かさについて考えることができたようである。

表2 学生が体感した社会経済的リアリティと客観的な統計データの比較

観点	学生の観察・実感 (レポートより)	客観的なデータ・背景 (外部資料より)	教育的効果
廃棄物問題	ゴミの山、腐臭、分別の欠如、埋め立ての限界への恐怖	ダバオ市のゴミ排出量は日量700-800トン。埋立地は2016年以降容量超過。焼却禁止法の影響	環境問題の自分事化、日本の処理技術への再評価
貧困と生計	日雇いの労働、天候に左右される生活、質素な住居	漁業世帯の多くが貧困ライン以下（月収<7,000PHP）。代替生計手段の欠如	構造的貧困の理解、社会保障の重要性の認識
幸福感	笑顔が絶えない、家族の絆が強い、ストレスが少ない	フィリピンの文化的特性（家族中心主義、楽観性）。社会的資本の厚さ	物質主義的価値観の相対化、幸福の定義の再構築

3.2.3 教育現場における公教育と私学教育の比較

ダバオ市内の公立の小学校と私立の小学校の両方を訪問できた。日本の金沢市のような地方都市においては大都市とは違い、公立の学校が当たり前で、一部私立の小学校が存在する程度である。公立と私立の格差はあまり感じられない。そこでフィリピンにおいて両者を訪問し比較を行った。

3.2.3.1 バラクタン公立小学校：リソース不足と「ハングリー精神」

ダバオ市郊外の山間部にある公立のバラクタン小学校への訪問は、フィリピンの公教育の現状を浮き彫りにした。校舎は窓ガラスがなく、外気がそのまま入ってくる開放的な構造であり、机や椅子は古く、教材も不足している。ICT機器はあまり大きくない23インチ程度のモニターが黒板の上に置いてあり、教師のPC画面を映すことで授業を進めていた。この小学校の校長と話す機会を持ったが、公立校では予算が十分ではなく、その予算取りが校長の手腕にかかっているとのことであった。

しかし、本校の人間科学部こども学科の学生たちが最も

衝撃を受けたのは、設備の違いではなく、児童たちの「学ぶ姿勢」の違いであった。ノートや鉛筆を大切に持ち、先生の質問に対して積極的に手を挙げ、目を輝かせて授業に参加する子どもたちの姿は、日本の教育現場で失われつつある「ハングリー精神」や「学習意欲」を体現していた。学生のレポートには、「日本の子どもたちは恵まれすぎていて、勉強する意味を見失っているのではないか」という危機感が綴られている。また、先生たちが限られたリソースの中で歌やダンスを取り入れ、エネルギーに子どもたちを惹きつける工夫をしている点にも、教員志望の学生たちはプロフェッショナルとしての感銘を受けている。

3.2.3.2 ミンダナオ国際大学（MKD）と日系人会学校：エリート教育と日本への眼差し

一方、ミンダナオ国際大学（MKD）やフィリピン日系人会国際学校の私立学校への訪問では、打って変わって整備された教育環境と、高度な日本語教育の現場を目の当たりにした。ここでは、冷房の効いた教室、マルチメディア機器、そして制服に身を包んだ学生たちが、将来のグローバルキャリアを見据えて学んでいる。

特にMKDの学生たちが流暢な日本語を話し、日本の文化やアニメに精通していることに、日本人学生たちは圧倒された。フィリピンの学生が「日本語・英語・ビサヤ語」を使いこなすマルチリンガルであるのに対し、自分たちの英語力の低さや、日本文化を発信する能力の欠如を痛感する場面も見られた。しかし、MKDの学生からの温かい歓迎（「おもてなし」）や、日本語での積極的なコミュニケーションは、日本人学生の緊張を解きほぐし、同世代としての親近感を醸成した。

この公立と私立の強烈なコントラストは、フィリピン社会における教育格差の現実を視覚化すると同時に、「教育とは何か（箱物か、中身か）」という根源的な問いを学生に突きつけた。

3.2.3.3 教員志望学生へのキャリア・インパクト

参加者の多くが教員を志望していることから、これらの学校訪問は単なる見学を超えた「実地研修」としての意味を持った。現地の先生が、威厳を持ちつつもフレンドリーに子どもたちと接する姿や、子どもたちが自己肯定感を持って堂々と発表する様子は、日本の管理教育的な側面とは対照的である。学生たちはレポートの中で、「自分が教員になったら、設備に頼るのではなく、工夫して子どもを惹きつけたい」「日本の子どもたちにも、もっと世界に目を向けさせ、学ぶことの喜びを伝えたい」といった具体的な抱負を述べている。フィリピンでの経験は、彼らの理想とする教師像をより具体的かつ力強いものへと更新させる契機となった。

3.2.4 異文化コミュニケーションのダイナミクスの実感

本校の学生はMKDの学生とは事前にZOOMでは1度話していたが、英語での意思疎通には自信が持てなかったようである。しかし、対面で話すことでその悩みが解消したようである。

3.2.4.1 「英語コンプレックス」の打破と非言語的交流

事前調査では多くの学生が「英語でのコミュニケーション」に対する不安や、自身の英語力不足を課題として挙げていた。しかし、現地での実践を通じて、その認識は劇的に変化した。HOJの子どもたちとの遊びや、MKD学生とのアイランドホッピングにおいて、学生たちは「完璧な文法」よりも「伝えようとするパッション」が重要であることを学んだ。言葉が通じなくても、ジェスチャー、笑顔、ハイタッチ、そして共にスポーツやダンスに興じることで、心を通わせることができるという原体験を得たのである。ある学生は「英語が話せないから話さないのではなく、間違っていて話しかけることが大切だと気づいた」

と述べており、減点主義的な日本の英語教育の呪縛から解放され、コミュニケーションの本質に到達したことが伺える。

3.2.4.2 ピア・ラーニングとしてのMKD交流

MKD学生との交流は、単なる観光ガイドとの関係を越えた「ピア・ラーニング（仲間同士の学び）」の場となった。特にアイランドホッピングの船上やビーチでの活動において、日本人学生はフィリピン人学生の「自己表現の自由さ」に衝撃を受けた。フィリピンの学生たちが、他人の目を気にせず自撮りを楽しみ、音楽に合わせて踊り、自分の意見を堂々と主張する姿は、同調圧力が強く「空気を読む」ことを求められる日本社会の若者にとって、眩しく、かつ羨ましいものとして映った。SNSへの投稿一つとっても、日本人学生が「どう見られるか」を気にするのにに対し、フィリピン人学生は「自分の人生をシェアする」こと自体を楽しんでいる。この文化的差異への気づきは、日本人学生に対し「もっと自分らしく生きていいんだ」という自己肯定感の向上と、抑圧的な自意識からの解放を促す効果をもたらした。

3.2.5 身体性と五感を通じた学び：スポーツと遊びの役割

子どもは英語でなく、現地の言葉のビサヤ語を話しており、こどもへのアプローチとして必要なのは正しい英語ではなく、体を使った表現であることを体感することができた。

3.2.5.1 身体的共鳴：言葉を越えた「遊び」の力

人間科学部スポーツ学科の学生を含む参加者たちは、フィリピンの子どもの身体能力の高さと、遊びに対するエネルギーの総量に圧倒された。HOJでのバスケットボールやバレーボール、ウラワビーチでの海水浴において、子どもたちは疲れを知らずに動き回り、日本人学生の方が先に体力を消耗してしまう場面が多々見られた。デジタルデバイスに依存せず、自然の中で全身を使って遊ぶフィリピンの子どもの姿は、日本の現代っ子が失いつつある「身体性」を再確認させるものであった。学生たちは、ボール一つ、あるいは何もない場所でも工夫して遊びを作り出す子どもたちの創造性に触れ、遊びの本質が「道具」ではなく「仲間と身体」にあることを学んだ。参加のスポーツ学科学生のような身体活動を専門とする学生にとって、言語を介さずに身体の動きのみで現地の子どもの一体感を得た経験は、スポーツが持つユニバーサルな価値を再確認する貴重な機会となったと推察される。

3.2.5.2 準備不足の悔しさと次への決意

学生たちが主催したHOJでのゲーム大会（福笑い、だるまさんが転んだ等）では、準備不足と言語の壁により、意図した通りにルールが伝わらないという挫折を経験した。学生たちは「英語が通じない子への配慮が足りなかった」「段取りが悪かった」と反省し、悔しさを滲ませた。しかし、この失敗こそが重要な学習機会となった。彼らは

「やって見せる（モデリング）」ことの有効性や、現地の言葉（ビサヤ語）を少しでも覚えようとする姿勢の重要性に気づき、その後の小学校訪問やMKD交流では、より周知な準備と工夫を行っている。このPDCAサイクル（計画・実行・評価・改善）を短期間で回す経験は、将来教育者や指導者を目指す彼らにとって、座学では得られない実践的なスキルアップの場となった。

3.3 アンケート結果

表3 研修後の参加者のアンケート結果（n=10）

	質問項目	結果 6件法（記載がないものは0人）
1	HOJでの児童との交流	とてもできた9人 できた1人
2	MKDとの交流	とてもできた5人 できた2人 どちらかといえばできた3人
3	同行したメンバーとの交流	とてもできた10人
4	小学校への訪問は役立つか	とても役立つ8人 役立つ1人 どちらかという役立つ1人
5	研修後の考えの変化	とてもあった7人 あった2人 どちらかというあった1人
6	後輩に勧めたいか	とても勧めたい6人 勧めたい4人

おおむねアンケートはすべての項目において肯定的意見が多かった。各項目の理由は自由記述でお願いしたった。

まず交流について、子供との交流はHOJでの5日間の滞在ということもあり、言語の壁を越えて遊んだ体験が大きいと思われる。またMKDの学生との交流は、英語でのコミュニケーションの必要性もあり、交流の体感度はHOJよりは減るが、船上で1日活動したこととおおむね達成できたように思う。参加したメンバー同士の交流は困難な環境をともに乗り越えなければならないという位置づけが大きいと思われる。本研修では、人と人との交流体験を重視していたが、おおむね成功したといえる。

次に学生の意識の変容については、教育に興味がある学生にとって、現地の教育機関（小学校）への訪問は、興味をそそるものであった。エネルギーな先生の指導と、何でも吸収しようとする児童の参加態度を見て、ある意味管理的な日本の教育との違いを感じ取ったようである。

そして、「自分が今まで考えていたことや物事の見方がガラリと変わったと感じる。」との学生の意見に代表されるように、研修後は多くの学生が自己の考えの変容について述べている。具体的には「物質的に恵まれた日本の生活が、逆に自然との関わりや「生きる力」を失わせているのではないかと危惧」「自分の常識（固定観念）から抜け出す難しさを知った。」「子供が『学びたい』と思える視点を大切に教員を目指す。」「自分から声を出す勇気を得た。この経験と積極的な姿勢を、将来教師になった時に伝えていきたい。」等、教育者としての視点を感じさせるものが多かった。

最後の後輩への勧めに関しては、「とても勧める」が6

割、「勧める」が4割となっており、「勧めたい」との意見がほとんどである。全員が勧めたいとの意見にならなかったわけを見てみると。女子の衛生面でのこだわりがあるようであった。

4. 研究のまとめ

以上のことから本演習がもたらす「価値」の総括を行う。

4.1. 「知っている」から「感じている」への深化

本演習を通じて学生たちが得た最大の価値は、知識の「身体化」である。貧困、環境問題、教育格差といったテーマは、大学の講義でも扱われるが、それらはあくまで抽象的な概念に留まりがちである。しかし、実際に腐敗臭のするゴミ山に立ち、家計を支えるために働く子どもと話し、インフラのない生活で不便を感じることで、これらの問題は「自分事」として学生の中に刻み込まれた。

4.2 日本という「環境」の再評価

フィリピンという「鏡」を通すことで、学生たちは日本という国を客観視する視座を獲得した。清潔な水、安全な街、整った教育制度への感謝を抱くと同時に、物質的な豊かさの中で失われつつある「精神的なハングリーさ」や「幸福感」「自己肯定感」といった日本の課題も浮き彫りになった。この複眼的な視点は、彼らが日本社会に戻った際、単なる現状追認ではなく、批判的かつ建設的に社会と関わるための基盤となる。

4.3 教育者としての資質向上

こども学科を中心とする参加者にとって、本演習は教員養成課程における決定的な転機となる可能性がある。リソースが限られた環境でも情熱を持って教える現地の教師や、学ぶことに渴望する子どもたちの姿は、教育の原点を問いかけるものであった。「教える」とは設備や技術の問題ではなく、人と人との魂の触れ合いであり、子どもたちの可能性を信じて引き出すことであるという確信を得たことは、彼らのキャリアにおいて計り知れない財産となるだろう。

4.4 今後の課題

参加者の満足度は極めて高いが、さらなる教育効果の向上のために以下の点を課題としたい。

- ・事前学習の強化: この演習の前には、座学としての「国際教育」の授業がある。その授業でもう少しフィリピンの現地の生活環境（特にトイレや水事情）やビサヤ語の

基礎について、より具体的な情報を伝えることで、現地での「カルチャーショック」を学習へのエネルギーにスムーズに転換できるようにしたい。

- ・協働プロジェクトの深化: MKDの学生との交流を単発のイベントに終わらせず、演習前の事前のオンラインでの会議を実施し、共通の課題（SDGsなど）に取り組むプロジェクト型学習（PBL）へと発展させることで、より深い知的交流が期待できる。
- ・振り返りの構造化: 毎日のレポートに加え、帰国後に時間を置いてからのインタビューや追跡調査を行うことで、一過性の興奮ではなく、長期的な価値観の変容を定着させる支援が必要である。

総じて、2025年のフィリピン国際教育演習は、参加学生に対し、教室の中だけでは決して得られない「生きる力」と「世界と向き合う覚悟」を授ける、極めて質の高い教育プログラムであったと結論づけられる。

参考文献

- 1) トビ立てJAPAN <https://tobitate-mext.jasso.go.jp/about/case/>
- 2) 「国際ボランティア演習」参加学生の意識の変容 人間科学研究 第8巻第2号 平成26年3月 清水和久
- 3) ICAN <https://ican.or.jp/>
- 4) 外務省 外交政策 https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/data/gaiyou/odaproject/asia/philippines/contents_01.html

資料編:2025年 国際教育演習報告書 ハウスオブジョイとダバオの2週間の記録

人間科学部こども科学 教授 清水 和 久

研修内容の記録

1日目 8月27日（水）移動日

朝6:00金沢駅出発。中部国際空港発のフィリピン航空。同日23時ダバオのSUMOホテル着。丸1日の移動日となった。

中部国策空港から出発するのは、朝金沢を出た場合、関西空港発の航空機でちょうどいい時間帯のものがいないためである。これまでは前日夜行バスで関西空港まで行くことが多く、当日出発で、当日中にダバオまで行くことができたのでありがたい。

ダバオまではマニラで乗り継ぐ必要があり、荷物をマニラでいったん受け取る必要があるかどうかの情報が不確定であったが、結局マニラで荷物を受けとり、ターミナル2へ移動。過去、このターミナル間の移動が厄介であったが、バスの乗りつぎもわかりやすく、簡単に移動することができた。ダバオに着いたのは夜の10時近くであった。

ダバオで荷物を受け取る時に、学生のスーツケースの車輪が1つ破損して脱落していた。本来はクレームをつけるが航空会社が補償してくれるはずであるが、深夜に着いたため窓口が閉まっており、日本に帰ってから、修理に出せば旅行保険でカバーできると考え、クレームは入れなかった。空港には手配していた車が待っており、車で15分くらいのSUMO ASIA HOTELにチェックインすることができた。

2日目 8月28日（木）鶏を捌いての夕食準備と海岸での夜光虫観察

朝8時sumoホテル出発。10時30分HOJ 着、以前は3時間ほどかかっていたが道が整備されたので2時間30分で到着。ダバオ市内の渋滞を抜ければ、高速道路並みのスピードであった。学校が道路沿いにある道の近くは障害物が置いてあり減速する仕組みになっている。到着後、児童施設内の案内を受ける。日本人のスタッフボランティア「ハルカ」と叡啓大学のインターン生「ユイ」さんの出迎えを受ける。叡啓大学では海外インターンシップ2週間が必修であるそうである。

着いて早々の昼食は、海藻の酢の物とバナナの花の揚げ物とご飯。揚げたバナナの花はとても美味。午後からは市場へ夕食の鶏の買い出し、希望者で鶏をさばいて命をい

ただくことになった。私も1羽しめることに、しめない学生は、果物と超栄養植物カモンガイの葉をむしる仕事。2つをあわせてスープにしておいしくいただく。

その後は小学校から帰ってきたHOJの元気な児童とバスケやバレーやバトミントンで遊ぶ。

夜の活動として新月に近い28日は海の夜光虫の絶好の観察チャンスということで、真っ黒な海へ入水。水中で手を描き回すとホタルの点のように光の点が拡散され幻想的な風景に見入る。

朝からの移動も含め、かなり充実した1日となった。学生のみなさんには日本ではできないことに、どんどんチャレンジして感じたことを書いてほしい！

3日目 8月29日（金）バイバイバトバト村と地域のゴミ山見学

この村はぜひ学生のみなさんに見て欲しい村であった。ここでやったHOJ版人生ゲームは、まさにこの地域に住んでいる人の人生そのもの。

ダバオ版人生ゲームとは、この地域のフィリピンの住民の一生を体験できるゲーム、HOJに来るボランティアスタッフが作成したもの。生まれが「大金持ち、普通、貧乏」学歴コースが「大卒、高卒、中卒」、それによってつける職業が「タンバイ」（ニート）や医者などバラバラで給料も違う。しかしお金持ちが必ず勝てるわけではなく、「お金と、子どもの数と、幸せを感じるハッピーチップ」の3つのどれかで優勝が決まるというルール。どれが基準になるかは最後のルーレットで決まるので逆転も十分可能であるというオリジナルゲーム。3人で1チームで実施。筆者のチームはスタートは貧乏でしたが、子どもの数では一番でした。職業はタンバイで途中からパンク修理業で生業を立てるようになった。最後の勝敗はハッピーチップの数で決まったので優勝できず。

バトバト村は、漁業で生業を立てている村であるが、前日は雨が降り漁に出られなかったようで、暇そうな漁師も多く見られた。鶏やアヒルなどが放し飼いになっており、不漁日が続く時の備えということか。午後からはゴミ山へ移動、行った時は露出していたゴミを埋めた後で、ゴミはさほどなかった。見学中にゴミ収集車がやって来た。以前は手作業でダンプからおろしていたが、現在は荷台が上が

り自動でおろすことが可能になっていた。ごみ処理にも予算がつけられるようである。行政の真剣度がわかる。夕方は中心街へ散歩、お店に入ってハロハロのかき氷と串やきを食べた。金曜日なのでよる8時まで子どもたちと遊ぶことができた。

4日目 8月30日（土）学生主催のゲーム大会

今日は学生主催で、考えたゲームを子供達に提供する日。事前に係は決めておいたのであるが、言葉の壁もあり、説明のイメージが持てず、教えることの難しさを知った日となった。

英語もあまり通じなかったが、話の段取りも大事。言葉が通じない時にどのように説明するかが体験できた場面であった。言語の壁と段取りの壁の2つ。言語の壁をいかに乗り越えるか。やって見せることが大事。どうすれば勝てるのかをやって見せて、勝った人が喜んで見せたり、負けた人が悲しんで見せたりすることで理解させることが必要。学生にとっては大変貴重な経験となった。

5日目 8月31日（日）ウラワビーチ海水浴

HOJの子供たちは、平日は学校があり、ビジターと遊ぶのは夜になるが、土日は、川や海に遊びに行っている。今回は1日目の夜に夜光虫を見に来たHOJの所有するウラワビーチヘジープでやって来た。HOJが創設される前に烏山さんと奥様のアイダさんが購入したプライベートビーチだそうで、当時は一帯の治安が悪いため安く購入できたとのこと、私が来た10年ほど前にはウラワビーチには何もなかったが、今ではロジもいっぱい立てて地域の人々に貸し出しHOJの収入源にもなっているそうである。今回も地元のお客さんと結構にぎわっていた。

ここで半日、思う存分子どもたちと海を満喫。昔の船着場からのダイブにはじまり、浮き輪でのんびり波間を漂ったり、砂に埋もれたりと思ひ思いに過ごす。天気も曇っていたので暑すぎることもなく、海遊びをとことん楽しめ、まさに童心にかえった1日を過ごす。日ごろここまで遊びつくすことはないくらいであった。ちょうどお腹がすいたころ昼食になり、バナナの皮にぶちまけた白米と魚料理、それに焼いたオクラを手づかみで食す。最初戸惑っていた学生も、我先に手づかみで食べ、最高の味を堪能した。

6日目 9月1日（土）カカオ農園見学とチョコレートを生産の説明

今回訪問したカカオ農園は日本人が関わる農園。昨年度はカカオからチョコレート製造までを体験させてもらった場所。今回は本人がいないので澤村さんの案内のみであったが、少し苦いカカオの実をかじってみたり、ココナツ

の実をカマで落とす体験をしたりした。現地ではココナツは「ブコ」と呼ばれており、1人1個丸々飲ませてもらった。

コーヒーやカカオはフィリピンの輸出品として有望であり、ダバオ産のチョコやコーヒーが日本でも有名になって買うことができるようになるかもしれない。地産地消が地球にとっては優しいが、より付加価値の高いものを生み出すことで現地の所得が増えることにつながる流れはどの国でも変わらない。

今日は子供たちと遊べる最終日であった。最後までとことん遊びつくした感がある。この直接交流体験をもとに、今後もHOJの子どもたちの成長をweb上で見守っていただける面白さを手に入れたことになる。未体験ゾーンのHOJの5日間で一皮向けた学生たちを見たような気がする。

7日目 9月2日（月）観光地マティの美しい海

マティでのアイランドホッピングツアーは、外国人が参加することはめったにないそうで、特に日本人は珍しいとのことである。今回のコースは、バニシングアイランド、バハダ島、ワニバン島の3つをめぐるコースであった。最初のパニシングアイランドは周囲50メートルぐらいで海面に少しだけ出ている小島。潮が満ちると海面下に水没する。まずはここに上陸。360度見渡す限りの海。フィリピンに来てよかったと思える景色である。次の島はバハダ島。ここにも上陸して、泳ぎながらサンゴ礁回遊を楽しむ。ライフジャケットとシュノーケルがあれば十分に波間を漂える。海面から海底を浮遊しながら魚とともに漂うと、究極の至福の時間。この島には他の観光船もやってくるが。観光船がくるたびに何かもらえるかと島の犬が海岸で待っていたり、なかには泳いで船までやって来るつわものの犬もいたりした。自分の身分をわきまえて居るらしく乗船まではしてこない。最後のワニバン島では上陸をせず島の近くに船を止めて、船の周りで泳いだ。午後からは少し波が強くなったので、早めに切り上げてもどる。このアイランドホッピングツアーは地元の富裕層を対象としたもので、外国人がここまで、やってくることは珍しいそうである。

8日目 9月3日（水）マティ サバンガン博物館見学「田舎と都市のギャップ」

一番ラグジュアリーなホテルに泊まった次の朝、ダバオオリエンタル州の魅力がつまったサバンガミュージアムを訪問。地元の自然や文化を学ぶ。地元の価値は住んでいる住民には、気が付かないことが多いが、世界遺産に登録されている固有の植物が多いハミギタン山の紹介などもふくめて博物館のガイドに英語で案内してもらう。

地元を価値づける施設は重要であり、地元のことに誇りを持ち、地元愛を育てる人々を育てることにつながる。「地元の小学生も見学に来るのか?」と聞いたら、やってくるとのことであった。入場料が地元民とほかの地域の人では2倍ぐらいの差があったので地元の人に来て欲しいのだろうと思う。

午後は、3時間かけてダバオへ。ダバオ到着後、SMモールで夕食。このSMモールの大きさは日本にはない規模で、中央の吹き抜けには天上から床まで届く巨大な縦長のディスプレイに滝の映像が映し出されていた。昨日までの田舎暮らしとは天と地の差である。ダバオにはこのようなモールがいくつもある。ただ排気ガスもひどく、HOJの澄んだ空気に慣れていたので、とたんにせき込むことになった。こどもを育てるには田舎がいいと感じたと瞬間であった。大通りを歩くにはマスクが必要。

9日目 9月4日(木) 公立小学校訪問「有名人の気分を味わった1日」

山間の公立小学校バラカタン小学校の見学。児童数280人(年長さんクラス、1年から5年は2クラス、6年は1クラス)校長も含めて教員数12名。全員が女性。当日は校長先生の娘さんが日本語通訳者として同行。この通訳者は元MKDの卒業生で、星稜大には短期留学で2016年に来ていたことが判明。現在は地元の日本企業「富士通」に勤めているとのことでした。

最初は3つのグループに分かれて4、5、6年のクラスを見学。私は6年生のクラスを見学。フィリピン語の授業であったが、先生が表情豊かに話しているところが素晴らしいと感じた。最初は課題について教師が話、その後グループワークで小討論、最後にグループごとの発表、評価というようにパターンが決まっているようである。

山間部の学校に外国人が来るのは珍しく、昼休は学生のもとにも子どもたちが押し寄せ、超人気状態。学生は日本では味わえないスター気分!教師になる自信をもらったのではないと思う。好奇心いっぱいの子どもの表情は、国籍や地域が違って世界共通であると感じたはずである。学生は、この経験から教師になりたいと強く思ってくれたのではないと思う。

10日目 9月5日(金) MKDへの訪問

5日はKSU(本校)の提携校であるMKDへの訪問であった。3年の日本語学科の学生と交流の機会となった。MKDの学生に校内の案内をしてもらう。また、MKDには日本語教師として在籍している日本人の先生もおいでた。自分自身の紹介を最近フィリピンの日本人の仕事として騒がれている「かけこ」ではなく「かねこ」ですなど、

日本語教師らしいウイットにとんだ紹介をしてもらった。日本語能力試験はN1からN5まであり、N1が一番難しいレベル。星稜で授業を受ける留学生にはN2程度の能力を求めているが、MKDではまずN5は最低限として取得を目指しているとのことであった。ダバオでは日本語を学べる大学として特色を出している。ここから日本企業で働ける学生を多く輩出している。

交流では、MKDの紹介プレゼンに始まり小グループに分かれてコーナごとのゲーム、最後の全員でフィリピンスタイルダンスなどとても歓待を受けた。日本の学生も用意した福笑いを行って共においに楽しむことができた。最後にフィリピンのお菓子を食べとても楽しい2時間となった。

おもてなしの心としてMKDの学生は名前のシールを胸に貼っており、日本の学生の分も用意しており、名前を覚えやすい配慮もしていただいた。最後には名前入りメッセージカードもいただいた。素晴らしいおもてなしであった。

夕方は山の上にある有名なジャックスリッジのレストランへ。これまでは旅行会社が用意してくれた貸し切りVANで移動していたが、予算の関係でこの日は自力でのタクシー3台に分乗して移動。レストランでは1人1000ペソ(2500円)あまりでおいしい料理をたらふく食べることができた。

帰り、レストランで、タクシーを頼むと自分でGRABを使って呼べとのこと、GRABとは日本でいうUBERに当たるものでスマホで車を予約するものである。フィリピンではGRABが幅を利かしているようである。1台のスマホに着き1台しか呼べないので、1台は呼べたが、山の中では学生のスマホにGRABをインストールできないので、結局はタクシーを呼んでもらう羽目になった。

新しい交通手段を使う方法に対応できれば、安全で安価に行動範囲を広げることができると感じた。

11日目 9月6日(土) アイランドホッピング「2つのアイランドホッピングの特徴比較」

今回は、マティに続く2回目のアイランドホッピングとなった。2つのコンセプトがだいぶ異なったので、両者を比較する。

表1 2地域のアイランドホッピングの違い

	マティ	ダバオ
船のサイズ	小規模な船	多数の大型船
対象客	地元の富裕層	観光客中心
内容	自然重視	商業運用重視

マティでのそれは、その地ではまだ外国人が珍しいとのこ

とで、これから規模や対象者が増えていく感じであった。
ここからは後者のダバオでの体験内容について述べる。
ホテルに集合し、星稜の学生はMKDの学生と各グループ
3人の5グループに分かれ、2台のジプニーに分乗して港

へ。小グループに分けることでより学生間の交流が深まる
のでMKDの配慮がありがたかった。

参加者は、MKD側（引率の先生2人と学生5人）、旅行
社側2人であった。

表2 ダバオ アイランドホッピング周遊コース（5か所の島めぐり）

訪問コース	内容
1) タリカット島上陸	海に慣れて浅瀬で泳ぐ。
2) 水上アトラクション	ジェットスキーに引っ張られてのバナナボートと小型ボートに搭乗、まさに観光客向けのアトラクションである。
3) 崖から飛びこみ体験	3段階の高さがあり、下段から飛び込みを体験、さらに高いところから行けそうな学生は、最上段からは10人中6人の学生が挑戦した。
4) シュノーケリング体験	結構沖合ではあったが浅瀬の場所なので、最後の海水浴ができた
5) WISHランド	コインを置くと願いごとがかなうという小島でMKDの学生とともにティックを撮影して楽しんだ。

MKDとKSUの学生が共通の体験をしながら丸1日過ご
せたのはとてもよかった。特に飛び込みなどはMKDの学
生にリードしてもらったのでやりやすかった。今回、同船
してくれたMKDのこのコースを学生と回することで船上で
も話に花が咲いたように思う。船上で学生同士SNSでつ
ながった人も多く、とても良い交流の機会となった。

12日目 9月7日（日）国立博物館とクロコダイル動物園
people's parkという公園にあるダバオの歴史を紹介する
国立博物館の見学。内部の吹き抜けにはジュートで作られ
たオブジェが天井から吊り下げられていた。このオブジェ
を取り囲む形でらせん状に回る通路を5階まで階下から見
学した。ダバオの鉱物資源から植物、動物、氷河期のゾウ
の展示など、自然史博物館に近いものがあり、登るにつれ
て人の営みや造形物が展示されていた。経済的に豊かにな
ってくると自分自身の国の成り立ちに関心を持ったり、誇
りをもったりできるようにこのような博物館は必要であ
る。無料であるということは多くの人の理解を得たいとい
う表れである。その意味でマティの自然史博物館との共通
点も感じられた。

クロコダイルパークでは、動物の見せ方は、日本ではや
りの動物の生態環境を再現したようなものではなかった
が、ビサイア語で話しているので内容はよくわからなかつ
たが、鳥や小動物が実際に参加するショーがおもしろかつ
た。最後に、ニシキヘビが園内で居なくなったという事件
がおこり、私たちが座ったベンチの下から見つかった。と
いうびっくりサプライズもあった。もちろんこれは演出で
あるが、お客を喜ばす演出は素晴らしい。

時間が早く終わったのでアラヤモールアブリザへ。SM
モールよりも規模は小さいが、内部が0型の形をしており
通路にそって周遊できる構造となっている。2時間程度で

あったがここで夕食をとった。

13日目 9月8日（月）日系人会小中高校「日系人会の 高校生のおもてなし」

先方の好意により日系人会の小中高の建物を5つのグル
ープに分かれて案内してもらった。高校ではフィリピン語
の授業を見せてもらった。内容は歴史で、マゼランがフィ
リピンに上陸してからスペインの統治が300年続くのであ
るが、その終わりごろの話であったように思う。賠償金の
値段や年号を問う復習問題を最後に行っていた。どのク
ラスにもモニターがあり、Power Pointを使った授業であ
った。

各学年4クラスで、星組、太陽組などの名前がついてい
た。幼稚園等もあり、前に訪れたMKDの大学までの一貫
した日系人会の学校で修学が可能である。日系人会の学校
と行っても日系人だけが通うのではなく地元の人も通える
ようであった。

やはり旅行は人との交流が一番面白い。観光地を回る普
通の旅行会社のツアーではこの体験はなかなかできない。
大学の授業としての醍醐味はここに尽きると思う。現地の
人とつながった学生には、ぜひそれを大切にしたいと思
う。海外に友達がいるということは、視野を広げること
になるので、相手が日本語を話す学生だったら、こちらか
らは英語で話すなどして互いにブラッシュアップして行く
関係だとおもしろい。

14日目 9月9日（火）移動日

帰国時は、ダバオ空港からマニラに乗り継ぎする必要が
あり、出発の便はどうしても9日の早朝のAM2:00の便
となる。マニラでの乗り換えの待ち時間は4時間程度なの
でこれでも乗り継ぎとしてはいい方である。また、今回の

フィリピン航空のいいところは1つ23kg以内の荷物なら2つまでOKだったこと。いままでLCCだと預け入れの荷物は1つだったので、フィリピン航空は2つまでOKという認識がなく、学生の指摘ではじめて気づかされた。はじめから大きめの鍵のかかる畳めるバックを持参すれば合計46Kgまで運べることに気が付いた。

関空に着いた後の日本食は特に美味しく、海鮮丼を食べた。やはり日本は繊細な味のバリエーションが多く、外国人が日本に来てその低価格さと美味しさでリピータになる気持ちはよくわかる。また、トイレの室内もきれいで、ウォシュレットや紙をそのまま流せるところの良さを改めて気づかされた。

海外に行ってみるとやはり日本の良さが改めて感じられる。しかし、「郷に入れば郷に従え」で現地では、その生活様式に慣れ、その暮らしを楽しむ余裕が必要である。そこで人が暮らしているのであるから、同じ人間である自分達にもできないことはないのである。ちょろちょりとしかでない「水シャワー」しかり、一瞬ハエがとまった食べ物でも、ハエをはらって食べることにあまり抵抗がなくなるという経験は日本ではなかなかできない。

まとめ 「研修に参加した学生への思いとHOJへの思い」

今年は男子学生4人、女子学生6人の参加があった。

HOJをとにかく学生にはじっくり楽しんで欲しく、5日間の滞在とした。さすがに教員を目指す学生だったので子どもに対する対応は素晴らしかった。事情があって親と別

れて暮らしているこどもたちであるが、ビジターの若い学生におもいきり甘えることができたと思う。それに対して学生も十分こたえていた。仲良くなった子どもたちの成長は、日本に帰ってもHOJのブログでこれから見守ることができるので、気にしてほしいと思う。人と人とのふれあいには国境はなく、とくに子供の資質は世界共通だと感じた。この出会いの記憶を大切に、これからの自分自身にとっての意味を考えて欲しいと思う。

この演習をはじめて約10年。人間科学部の学生は他の学部比べて外国に行く機会が少なかったもので、この授業をはじめた。将来教育に携わる人間こそ異文化に触れ、人と交流してほしいと考えている。この国際教育演習は、数年はコロナやテロでHOJにいけない時期があり、ミンダナオ島のサンボアング地区でのテロ事件の時は、3年間ほど行先をセブ島に変更した。基本HOJに行って子供たちに会ってほしいというのがこの演習の私の基本的な考え方である。物理的な面で日本のように快適ではなかったかも知れないが、精神的な面でこどもたちや学生と交流する楽しさを味わい、人間としての成長する機会であったと自負している。

この国際教育演習のプラス面を多くの友人、背中を押して参加させてくれた保護者の方や兄弟に語ってほしいと思う。そして自分の人生経験の糧として、人生において立ち止まらず負えない時に思い出して欲しい。

表3 2025年度 国際教育演習の日程

日	月 日	内 容
1	8月27日(水)	出発日 金沢→中部国際空港→マニラ→ダバオ
2	8月28日(木)	HOJ 市場で買い出し、夜光虫観察
3	8月29日(金)	HOJ バトバト村・ゴミ山見学
4	8月30日(土)	HOJ 学生主催のゲーム大会
5	8月31日(日)	HOJ ウラワビーチ海水浴
6	9月1日(月)	HOJ カカオ農園見学
7	9月2日(火)	マティ アイランドホッピング
8	9月3日(水)	マティ サバング博物館見学、ダバオ SM モール
9	9月4日(木)	ダバオ バラクタン公立小学校訪問
10	9月5日(金)	MKD 訪問 & ジャックスリッジ
11	9月6日(土)	MKD とアイランドホッピング
12	9月7日(日)	国立博物館、クロコダイルパーク、アラヤモール
13	9月8日(月)	日系人会小中学校と高校訪問
14	9月9日(火)	帰国日 ダバオ→マニラ→関空→金沢